

エジプト新王国時代とエーゲ海世界

―トトメス三世とアメンホテプ三世の治世を中心に―

遠藤 颯馬

はじめに

古代エジプト新王国時代（紀元前一五五〇―一〇六九年）は、国際化の時代であった。⁽¹⁾ ナイル川流域で、しばしば内向的と称されるほど、独特な固有の文化を形成してきたエジプト王朝史が、以降オリエント世界を舞台に展開をしていくことになるのである。エジプトは、そのなかで大国として君臨し、他国との直接的な衝突を避けるため、柔軟に外交的手段を駆使した。すなわち、シナイ半島やヌビアなどの以前より勢力下においていた地域には、軍事遠征や朝貢によって従属関係を継続させる一方で、ミタンニヤやヒッタイトなどの大国とは書簡などの交換を通して、勢力の均衡を目指した。そのような国際関係のなかで、当時の国家間関係を考える際には、二か国間だけではなく、オリエント世界全体を視野に入れた考察がなされてきた。

本稿も、その試みのひとつである。ここでは、新王国時代のエジプトとエーゲ海世界の関係について扱う。両地域の関係に関しては、既に多くの論考が発表されているが、依然として包括的な交流史を描くまでには至っていない。その原因のひとつとして、広くオリエント世界という文脈で、エジプトとエーゲ海世界の関係を理解しようとする姿勢が、エジプ

ト学者とエーゲ海考古学者の両方に決定的に欠けていたことがあげられる。このことは、古代オリエント世界の外交史を研究する場合でも同様で、エーゲ海世界の事情を勘案して議論がなされることはほとんどない。つまり、エジプトとエーゲ海世界の関係は、当時の国際化したオリエント世界にあっても、常に他と切り離されて論じられてきたのである。では、なぜ研究者たちは、そのような不当な見方をしてきたのだろうか。その理由としては、エジプトを含むオリエント世界の大国と比較して、エーゲ海世界の社会的規模が全く異なっていたこと²⁾や、交流を示す史料が断片的であるが故に、各々の解釈に関して意見の一致を見ないことがあげられるだろう。しかしながら、社会的規模を理由に、議論から除外してしまうのは、あまりに早計である。むしろ今、私たちが取り組むべきは、エジプトとエーゲ海世界の交流を示す史料を、オリエント世界の国際情勢に照らし合わせて理解していくことではないだろうか。そこで筆者は、このような問題意識のもと、新王国時代のエジプトとエーゲ海世界の関係について論じていく。まず次節にて、先行研究を概観し、問題の所在及び議論の射程を明確にする。

一、先行研究の回顧とその問題の所在

エジプトとエーゲ海世界は、エジプト側の編年でいうと、古くは古王国時代より文化的接触が認められる³⁾、より密接で直接的な接触の証拠が見られるようになるのは、新王国時代に入ってからである。当該時期に、双方の地で発見される考古資料によって、エジプトとエーゲ海世界の間で何らかの交流があったことは、エジプト学の黎明期より認識されていた⁴⁾が、先鞭をつけたのは、ペンドウルベリーの論考であった。彼は、エジプトの壁画や考古資料を用いて、アメンホテプ三世の時期を境に、ギリシア本土を起源とする史資料が増えること、クレタの宮殿の崩壊期とその時期が重なることを根拠に、ギリシア本土の文明（ミケーネ）によってクレタ島のそれが支配されるに至ったと論じた。今日のギリシア考古学

の成果によって、ペンドウルベリーの前提としていたミノア文明の崩壊時期の年代が合わなくなっているので、彼の説を積極的に支持する研究者はもはやいないが、彼の議論がその後の活発な東地中海世界の交流史研究の口火をきることになる。戦後まもなく発表された、カンターによる仕事⁽⁵⁾はその代表例だろう。彼女は紀元前二千年紀エジプトを含むオリエントとエーゲ海世界の関係において、大きな役割を果たしたのは、ミケーネ文明の工人や船乗りたちであったと主張した。その後、今日に至るまで彼ら二人の研究を土台として、考察が続けられてきた。

新王国時代のなかでも、とりわけ、議論の俎上に挙げられてきたのが、トトメス三世からアメンホテプ三世に至るまでの時期である。当該時期に入り、これまで散発的であった史料が、量及び質において急激に変化するからである。しかしながら、その実態について、依然として不明瞭なのは、各々の史料の解釈において研究者間の意見の不一致が存在するからである。西アジアとの場合と異なり、エジプトとエーゲ海世界の間では、アマルナ文書のような直接的な外交交渉を示す史料は存在しない⁽⁶⁾。それ故、研究者たちは、各々の地で出土する考古資料、エジプトの壁画や文書から交流像を構築してきた。しかし、前者は考古学的発見の偶然性を、後者は、エジプト王権観を考慮に入れて史実を抽出しなければならぬ。はたして、各々の史料の解釈について、議論に議論を重ね、決着を見ないまま今日まで至っているのである。

一例として、テーベの私人墓の壁画表現に関しての問題がある。第十八王朝トトメス三世の治世前後になると、高官の墓に朝貢図として、エーゲ海の文化圏に属すると推測される人々が描かれるようになる。エジプトでは、テル・アル・ダバア遺跡の牛跳びの図など、それ以前からエーゲ海を起源とする表現が見つかっている。朝貢図のなかに、エーゲ海から来たと思われる人々が描かれることは、従来なかったこともあり、この時期には、彼らがエジプト王に朝貢に実際に来っていたのではないかと想定されてきたのである。しかしながら、この解釈をめぐって、ヴェルクテールがそれらを集成し発表⁽⁸⁾して以来、議論的⁽⁸⁾となってきた。多くの研究者が、壁画の描写が、歴史的事実を語っているのか否かを長きにわたり議論してきたのである。事実であるとするなら、当該時期にはエジプトとエーゲ海世界の間で、書簡のやり取りなどは見

つかっていないものの、外交的な交流があったという確かな証拠となるだろう。現状では、当史料の歴史的事実性に対して是認派と懐疑派がいる。前者の立場をとるヴェルクテルは、壁画表現を墓の主人の経歴と結び付けて考えた。彼によると、ファラオに対しての外交使節との立ち合いは、当時のエジプトの高官にとって最も名誉な瞬間であるので、意図的に自らの墓の壁画に記録を残したという。それ故、各々の表現は、相違点が見られ、歴史的な事実の証言とみなしても差し支えないという。⁽⁹⁾ パナギオトポラスもまた、ヴェルクテルの研究に拠りつつ、壁画を詳細に分析し、表現を史実とみなしている。⁽¹⁰⁾ 一方でワクスマンは、メンケペルラーソン墓に現れるエーゲ人は、シリア・パレスチナの表現と混在して描かれていることを指摘し、史料としての扱いに慎重な見方を示している。⁽¹¹⁾

論争的になっているのは、壁画史料だけではない。他にも、次章でみるエーゲ海リストと呼ばれる史料も、その例に含まれる。さらに基本的なところでは、エーゲ人を表すエジプト語においても、通説とは異なる意見を持つ研究者すらいるのである。⁽¹²⁾ 特に今世紀に入り、その数が増えてきたことは、これらのエジプト語の定着に大きな影響を与えたエーゲ海考古学者アーサー・エヴァンズの理解には、様々な問題があることを研究者たちが意識し始めたこと⁽¹³⁾の証左であろう。

このように、新王国時代のエジプトとエーゲ海世界の関係をめぐっては、基本的な事実すら不確定なのである。では、当問題に対して、まず私たちがなすべき作業とは如何なるものだろうか。筆者は、通時的な視点で、史料を検討する必要があると考える。先行研究においては、これまで各々の史資料の解釈に拘泥し、それらを通時的に考察することが殆どなされてこなかった。冒頭で述べたように、エジプト側のエーゲ海世界との交流の痕跡を示す史資料は、トトメス三世とアメンホテプ三世の治世に急激に増加する。この事実は、新王国時代の一時期において、両地域が何らかの形で、密接な関係を築いたことを示唆しているだろう。それでは、そこには如何なる歴史的な背景があったのだろうか。先行研究では、そういった問いを発することなく、個別の史資料の解釈を試み、曖昧な交流像を提示することしか出来ていなかった。⁽¹⁴⁾ よって、次章では、対象となる時期の史資料を整理し、通時的に検討していくことにする。

二、トトメス三世とアメンホテプ三世の治世

トトメス三世（紀元前一四七九年頃～一四二五年頃）は、単独統治を始めると、数多くのアジア遠征を行ったことで知られている。史料にも諸外国の情報が記されるようになり、そこには、エーゲ海世界についても触れられている。この時期より、エーゲ海の人々が、より継続的にエジプト側の史料に現れるようになるのである。とりわけ、重要な史料が二つある。先にあげたテーベの私人墓の壁画（画像資料）とトトメス三世の年代記（文字資料）である。

テーベの私人墓に関しては、前節で既に先行研究を紹介したが、実は、トトメス三世以前の私人墓にもエーゲ海の人々が現れている。ハトシエプスト女王から異例の寵愛を受けていたことで知られる、高官セネムトの墓(NT1)である。その列柱式玄関には、エーゲ人の朝貢図が描かれている。⁽¹⁵⁾ 損傷が激しく且つ文字による説明がないため、判断が難しいが、手にしている容器や服装から、彼らがエーゲ海からやってきた人々であることは間違いないと思われる。壁画が描かれた年代を厳密に特定するのは難しい。しかし、セネムトが史料から見出せなくなるのが、ハトシエプスト女王の治世十六年頃と推測されていることから、その前後と推定しても差し支えないだろう。いずれにしても、その頃より、エーゲ海の人々はエジプトの私人墓に登場することになるのである。

そして、それ以降、幾つかの私人墓で彼らの姿が見られるようになる。それらを、第1表に編年順にまとめた。そのうち、アンテフ墓(NT15)に関しては、壁画の保存状況が悪く、断片的にしか残存していないので考察が難しい。⁽¹⁶⁾ また、プイミレ墓(NT39)の壁画も判然としない。プイミレは、そもそもハトシエプスト女王の時代より王家に仕えていた⁽¹⁷⁾ が、デイビスによると、彼は、トトメス三世の単独統治開始と同時に自身の墓を準備し始めたという。よって、これがエーゲ人と認められれば、先のセネムトに続く時期の証拠となるが、現段階では判断は難しい。先に述べたように、こ

〈第1表〉エーゲ海世界からの朝貢団が描かれる私人墓

墓の所有者	役職	治世
セネムト(TT71)	アムンの家令	ハトシェプスト女王
プイミレ(TT39)	アムンの第二預言者	ハトシェプスト女王～トトメス三世
アンテフ(TT155)	王の偉大な使者	トトメス三世
ウセルアムン(TT131)	宰相	トトメス三世
メンケペルラーソネブ(TT86)	アムンの第一預言者	トトメス三世～アメンホテプ二世
レクミラ(TT100)	宰相	トトメス三世～アメンホテプ二世
アメンエムハブ(TT85)	軍の代理指揮官	トトメス三世～アメンホテプ二世

これらの壁画をめぐっては、その表現が史実かどうかが議論されてきた。⁽¹⁸⁾ その主な関心は、それぞれの描写の図像的な相違を見出すことにあった。ここでは、その束縛から一度離れ、通時的に本資料を比較してみることにする。

そこから、編年的に後の時代、すなわち、トトメス三世の治世後半からアメンホテプ二世の治世初期に活躍したとされるメンケペルラーソネブ墓(TT86)、レクミラ墓(TT100)、及びアメンエムハブ墓(TT85)には、それ以前の墓とは異なる点を指摘することができるのである。それは、壁画に付随する碑文である。レクミラ墓には、次のように記されている。

「プントの貢ぎ物、レトウヌの貢ぎ物、ケフティウの貢ぎ物、陛下の威光でもたらされた全ての国々からの戦利品とともに、南方の国々の貢ぎ物の受け入れ、上下エジプトの王、トトメス三世は、永遠に生命を与える・・・レクミラ」⁽¹⁹⁾

「ケフティウの頭領と海の真ん中の島々の頭領が、平和的にやってきて、陛下の威光に向かって腰を下ろし、頭を下げ、上下エジプトの王は、彼らが王の全ての国々に対しての勝利を耳にし、貢ぎ物を背負ってきたとき、永遠に生命を与える・・・」⁽²⁰⁾

加えて、アメンエムハブの墓には、次のようにある。

「上レトウヌの全ての首長、下レトウヌ、ケフティウ、メンヌウスの全ての首長、全ての土地が団結した」⁽²¹⁾

ここに見られるケフティウというエジプト語こそ、エーゲ海世界の人々を指すと通説的に理解されているものである。すなわち、編年的に後の時代の壁画には、エーゲ海からの使節団の描写に、エジプト語による併記がなされるようになるのである。このことは、トトメス三世の治世後半に入って、エジプト人たちが、エーゲ海世界に対してのより確かな理解を確立させたことを示唆しているのではないだろうか。

この仮説を裏付けるように、トトメス三世の年代記と呼ばれる史料には、以下のような記事がある。⁽²²⁾

「見よ、陛下の全ての港には、デジャイ、ケフティウの船、ビプロスの船、棒やマストを積み込んだスギのセクトウの船から陛下が受けたものうち良きものが運ばれた、素晴らしい木々とともに・・・陛下」⁽²³⁾

「タナヤの「頭領の貢ぎ物」…銀の四つの取っ手、鉄の容器に加えて、ケフティウの手なる銀の容器、合わせて五六デベン四キテとなる」⁽²⁴⁾

前者は、トトメス三世の九度目の遠征（治世三十四年）、後者は十七回目のもので（治世四十二年）の記事である。両者とも、この時期に、ケフティウやタナヤといったエーゲ海の地域とエジプトの間で何らかの交流があったことを示している。この碑文だけでは、具体的なことは分からないが、年代記に書かれている西アジアやヌビアなどの史料に目を向け、形式や内容がほぼ同様であることに注目したい。例えば、前の碑文と同じ治世三十四年のキプロスやクシュ（ヌビア）の

史料を示してみよう。

「この年」のイシの頭領の貢ぎ物…純銅の塊百八個、二千四十デベン…鉛の塊五個…一二〇〇の鉛…ラピスラズリ、一
一〇デベン…象牙一つ…の奴隷、木⁽²⁵⁾」

「哀れなものクシユの税…金、三〇〇デベン…六〇人の黒人たち…イレムの頭領の息子…」

…合計、六四…牛「九五…子牛」一八〇…合計、二七五…そのうえ、象牙、黒檀、この国の全てのものを積み込んだ
「船」…クシユの収穫物も同様に⁽²⁶⁾」

これらは、エジプト王に対する朝貢に関して言及している。古代エジプトでは、諸外国についての記述の多くが、このような様式で書かれているので、これ自体は珍しいものではない。だが、エーゲ海世界の関係においては、それは当てはまらない。古代エジプトの王権観を強く反映した史料で、彼らが記されるのは初めてのことだからである。すなわち、この史料の時期も鑑みるに、エーゲ海世界の人々は、トトメス三世の治世後半に、エジプトの周辺諸国のひとつとして認識されるようになったと考えられる。そのためには、エジプト人が、以前よりもエーゲ海世界の人々との密接な関係を築いている必要があったであろう。先行研究では、エジプトとエーゲ海世界の交流は、トトメス三世の治世頃に活発になったとしてきた。だが、状況証拠から推測するに、より正確には、それはトトメス三世の治世後半と修正すべきである。

一方、アメンホテプ三世の治世（紀元前一三九〇年頃～一三五二年頃）は、エジプトとエーゲ海世界の結びつきが最も密接だった時期だと考えられている。この時期になると、前節で扱った壁画史料には、エーゲ海世界からの使節は見出せなくなるが、更に重要な史料がいくつか発見されている。そのなかでも、長く議論されてきたのが、いわゆる「エーゲ海

リスト」と名付けられた史料である。これは、王家の谷に近いコム・エルⅡヘタンにあるアメンホテプ三世の葬祭殿で発見された、彫像の台座に刻まれている地名リストであり、キツチンによって紹介され、エデルが詳細な報告書として刊行した⁽²⁹⁾。そもそも地名リストは、新王国時代の史料においてはしばしば見られるものであるが、多くの研究者たちの耳目をひいてきたのは、エーゲ海の地名が初めてエジプトの史料に登場すると考えられているからである。そこには、中央部に、アメンホテプ三世のカルトーシユがあり、その右側にケフティウとタナヤと記され、左側から一二のエーゲ海の都市名が並んでいる。そして、今日ギリシア語に復元されているところによると、①アムニッス、②フェストス、③キュドニア、④ミケーネ、⑤ディクテ、⑥メッセニア、⑦ナウプリオン、⑧キュテラ、⑨イリオス、⑩クノッソス、⑪アムニッス、⑫リュクトスとなる⁽³¹⁾。⑤ディクテに関しては、テーベやカトーザクロと、⑥メッセニアや⑨イリオスも、他の都市名と比定する説もあり、復元において意見が必ずしも一致しているわけではない。ただ、トトメス三世の治世の壁画においても見られたケフティウとタナヤという固有名詞とともに、これらの都市名が刻まれたという事実は、当時のエジプト人たちの間で、エーゲ海世界の地理に対して一定の知識を持っていたことを示唆するものだろう。では、この史料は何を物語っているのだろうか。

以前バナールは、これをエーゲ海の諸都市をエジプトが支配していた証拠とみなしたが、今日、通説として考えられているのは、エーゲ海リストをエジプトの巡航ルートと考える説である⁽³⁴⁾。つまり、このリストに挙げられている都市の順序で、エジプトの使節団がエーゲ海を巡航していたと主張しているのである。その根拠として、リストにアムニッスが二度出てくることや、アメンホテプ三世のカルトーシユが入ったスカラベとファイアンス板が、復元されたエーゲ海の都市から出土していることが挙げられている⁽³⁵⁾。そして、この史料を巡航リストとみる研究者たちによって、アメンホテプ三世の治世における、エジプトとエーゲ海世界との外交的な接触が想定されてきたのである。

しかしながら、筆者は、先行研究では、当史料の意味をあまりに拡大解釈しすぎていたと考える。エーゲ海リストも、

あくまで地名リストと呼ばれる史料のひとつなのである。それにもかかわらず、なぜエーゲ海リストだけが遠征隊の巡航ルートを意味していたのかを先行研究では、説明することができていない。エーゲ海リストは、報告書を刊行したエデルによって、一緒に報告された他のリストとともに、Eとアルファベットで分類されている。そして、AからDには、ヒツタイトやミタンニ、バビロニアなどの地名が刻まれている。⁽³⁶⁾ それでは、他のリストもエジプトの外交使節の巡航ルートを示したものであるのか。このように、先行研究では、当史料の特殊性のみが、独り歩きして議論が進められてきてしまったのである。

ここで、筆者は、原点に戻って、アメンホテプ三世の時期になると、エジプト人たちが、エーゲ海世界に対する地理的な知識を持つに至っていたことに注目したい。前節では、関連する史料における、それ以前には見られなかった点を指摘し、トトメス三世の治世後半に、エーゲ海世界との交流が密接になった蓋然性が高いことを示した。当史料もまた、地名リストというエジプトの伝統的な史料に、エーゲ海の地名が初出するという点にこそ、その本来の価値があるのではないだろうか。そして、これもまた、両地域の直接的な交流を示すものではないが、当該時期の強い結びつきを示唆する状況証拠となり得るのではないだろうか。

このことは、次のアクエンアテンの治世の史料に注意を払うことで、エーゲ海リストの意義がより明確になってくるように思える。次のアクエンアテンの治世に入ると、エーゲ海世界との前例のない繋がりを示す二つの史料がテル・アル・アマルナの地から見つかっている。ひとつは、大量のミケーネ土器である。テル・アル・アマルナは、アクエンアテンの治世五年頃に建設が開始され、八年目には境界碑によると遷都が完了したとされ、その後、ツタンカーメンの即位後すぐに放棄されたとされている。⁽³⁷⁾ つまり、当地が都として機能したのは、およそ二十年の間だったと推定されるが、その地で大量のミケーネ土器が発見されているのである。その数は、少なくとも六〇〇と考えられており、その形態や大きさの同質性という点からみても例外的である。⁽³⁸⁾ 加えて、その出土地が、神殿や王宮のある都市の中心街に集中しているという事

実は、ハンキーによると、土器は、その内容物も含め、王家の活動と密接に結びついていたとことを示唆しているとい⁽³⁹⁾う。そして、エーゲ海起源の考古資料の急激な増加を、その使節団のエジプト訪問の結果として、説明しようとする研究者がいるほどなのである。⁽⁴⁰⁾もうひとつは、ペンドウルベリーによって発見されたパピルスの断片である。そこには、エジプトの兵士とともに、興味深いことに、エーゲ海に、とりわけミケーネに特徴的なヘルメットを身につけた兵士たちが描かれている⁽⁴¹⁾。この図像は、否応なしに、私たちに当時エーゲ海の人々が既にファラオに傭兵として雇われていたことを想起させる。

これら二つの史資料から、エジプトのエーゲ海世界との関係は、アクエンアテンの治世のテル・アルIIアマルナ遷都後、人的もしくは物質的交流が可能なまでに、緊密なものとなっていたと考えられるのである。このことを前述したエーゲ海リストとの関連で考えるならば、アメンホテプ三世の治世がひとつの転換点となったと見るべきであろう。

章の結びとして、これまでの考察結果をまとめておきたい。本章では、新王国時代のエジプトとエーゲ海の関係について、これまでの各々の史料解釈に拘泥してきた現状を批判し、通時的に考察することが必要であると指摘した。そのうえで、比較的史資料に恵まれ、先行研究上、両地域の関係が密接であったとされるトトメス三世及びアメンホテプ三世の時代の検討を行った。考察の結果、両時代は、エーゲ海世界との関係を考えるうえで、転換点となった時代であったことが確認できた。

では、新王国時代のエジプトのエーゲ海世界との関係の変化は、どのような歴史的事象でもって説明されるべきなのだろうか。両者の治世を特徴づけるのは、積極的な外交姿勢を一貫して貫いていたことである。トトメス三世は、十七回も海外遠征を行ったことで名高く、一方アメンホテプ三世も、アマルナ文書が示すように、諸外国との連帯を強めることに努めたことで知られる。逆説的にいえば、両王とも在位中、国際情勢に常に無関心でいることはできなかつたとも言えよう。筆者は、先に述べたように、エジプトとエーゲ海世界の関係も、当時のオリエント世界の国際関係を念頭に置くこ

とで、初めて正しく理解されると考える。よって、当時の国際情勢や外交政策について考察することが次章の課題となる。

三、オリエント世界のなかのエジプト―外交政策上の共通点―

トトメス三世の外交政策における中心的課題は、勃興してきたミタンニの脅威に対処することであった。ハトシエプスト女王の在位中、アジアへの軍事遠征を行わなかったこともあり、ミタンニは、当地での存在感を拡大させ、シリア北部のカデシユを盟主とする反エジプト同盟を結成させた。シリア・パレスチナの大部分が、ミタンニの勢力圏となったのである。その脅威に対応すべく、王は、単独統治の開始後、すぐに軍事遠征を行い、以来ほとんど毎年アジア遠征を行った。⁽⁴²⁾ 治世当初は、ハトシエプスト女王の時代に増大した反エジプト同盟を掃討することを目的としていたと思われるが、それが成功すると、治世三十三年の第八回目の遠征より、その背後にいたミタンニを打倒することを目指すようになった。⁽⁴³⁾ そして、治世四二年に、カデシユを含むオロンテス河中流域以南までの支配を取り戻すと、それが、在位中の最後の軍事遠征となった。⁽⁴⁴⁾

ここで注目すべきは、トトメス三世が、治世前半よりも後半にはるかに多くの遠征隊を派遣しているという事実である。最大規模であったとされる治世三三年の遠征は、第八回目であったが、それから最後に実施された治世四二年まで、ほとんど毎年遠征隊を組織しているのである。このことは、治世後半のトトメス三世が、対外情勢に強い関心をもっていたことを示唆しているだろう。実際にそれは、前章で見たように、史料的にも裏付けることができる。

また、トトメス三世の治世下のエジプトとエーゲ海世界を考えるうえで、重要な史料が、ヒッタイトの都ハットウシヤから発見されている。それは、一九九一年に見つかった青銅製の剣である。そこには、当時の国際語であったアッカド語

で、以下のような銘文が刻まれていた。

偉大な王トウトウハリヤが、アッシュウワを壊滅させたとき、彼の神である嵐の神にこれらの剣を捧げた⁽⁴⁵⁾

この史料は、トトメス三世と同時代のヒッタイトの王トウトウハリヤが、アッシュウワが起こした反乱を鎮圧したという事件について伝えている。これは、他のいくつかの粘土板史料にも言及がなされていることから、ヒッタイト学者に、アッシュウワの乱として知られている⁽⁴⁶⁾。先に、当時のエジプトの外交政策上の課題が、ミタンニをどう抑えるかであったと述べた。だが、一方で、ヒッタイトも同時に力をつけ始めていた。プライスによると、ヒッタイトが、当時すでにアレクポを始めとするミタンニやエジプトの勢力圏の地域を狙っていたとも推定されており、周辺諸国にとって潜在的脅威となっていた⁽⁴⁷⁾。そして、興味深いことに、ヒッタイトが壊滅させたと述べているアッシュウワこそ、エーゲ海世界と同定されているのである⁽⁴⁸⁾。

ここで、エジプト側の史料をみたらうえて、このようにオリエント世界の情勢に目を向けてみるなら、以下のような歴史的な状況が想定できるのではないだろうか。すなわち、ミタンニの脅威に対処するため、トトメス三世の治世後半に、国際情勢に強い関心を払い、エジプトは本格的に軍事遠征に取り組み始めた。一方で、エーゲ海世界も、拡大するヒッタイトの勢力に対抗する必要があった。そして、両地域とも、差し迫った外交的な脅威があったからこそ、密接な関係を持つに至ったと推測することができるのである。

アメンホテプ三世の治世においては、トトメス三世の時代とは異なり、ミタンニとは友好的な関係であったとされる。その関係は、ミタンニの王女が、アメンホテプ三世の妃として迎えられることで、さらに強化された。この両国の関係改善は、増大し続けるヒッタイトの脅威に対処するためのものであったと考えられる。アメンホテプ三世は、ヒッタイトの

勢力拡大を防ぐため、他にも、バビロニアやアルザワとも同盟を結んでいる⁽⁴⁹⁾。当時の外交史料であるアマルナ文書に、アメンホテプ三世の外交政策を垣間見ることができる。例えば、ミタンニとの書簡では次のようにある。

「あなたは、私の父と親しい仲でしたので、それで私は手紙を書き、あなたに私の兄弟がこれらのことを聞き、喜んだと言ったのです。父は、あなたを愛していた。同様に、あなたも父を愛していたのです。この愛に従って、私の父はあなたに私の妹を与えたのです。他の誰が、あなたがしたように私の父を支持するでしょうか⁽⁵⁰⁾」

ここでは、父親が王のときに、ミタンニの王女がエジプトに嫁いだことが示されている。このあとでは、自分の代となっても両国の友好関係を望むと述べている。また、小アジアの西に位置していたアルザワとも書簡を交わしている。

「見よ。カルバヤは、私に以下のように言った。ぜひ、血縁関係になりましょう。もし、あなたが私の娘を本当に望むなら、(どのように) 私は彼女をあなたに贈るべきですか？私は、彼女をあなたに嫁がせますとも⁽⁵¹⁾」

このように、アメンホテプ三世は、エジプトから遠く離れたアナトリアの西部の地域にまで、関係強化を試みているのである。その意図としては、繰り返しになるが、ヒッタイトに対して包囲網を構築することにあつた。そのように考えてみれば、当然の成り行きとして、エーゲ海世界とも関係強化を模索しても何ら不思議ではないように思える。実際に、その仮説を裏付けるように、ヒッタイトの史料の考察から、当時エーゲ海世界が、アナトリア西部での反ヒッタイトの活動を支援していたことを主張する研究者もいるのである⁽⁵²⁾。

ここで、先に論じたトトメス三世の時代の状況との共通点に気が付くであろう。すなわち、どちらの時代においても、エ

ジプトとエーゲ海世界は、増大する大国の潜在的な脅威に対処するために、積極的に外交に従事していたのである。結果的に、互いの利害関係が一致することで、両地域が強く結びついたのではないだろうか。

むすびに

以下、これまでの議論をまとめ、むすびとしたい。冒頭で、先行研究では、各々の史資料の解釈に熱心に取り組む一方で、二つの姿勢が欠けていたと指摘した。ひとつに、通時的な視点で検討すること、もうひとつに、両地域の関係を当時の国際情勢に即して考えることである。このような問題意識のもとで、史資料に恵まれ、通時的に検討が可能なたトメス三世及びアメンホテプ三世の治世を中心に考察を試みた。その結果、両時代とも、エジプトとエーゲ海世界を考えるうえで重要な一時代であることが分かった。そのうえで、オリエント世界の状況に目を向けてみると、外交政策の観点からも、両時代においてはいくつかの共通点を見出すことができた。すなわち、エジプトは、増大する潜在的な脅威に対応するため、積極的な外交姿勢をとっていた。その一方で、同時期のエーゲ海世界の側にも、同様の動きが認められた。そのような外交姿勢こそ、両地域を結び付けたのである。両地域の間で直接的な交流を示す史料は存在しないため、本稿では、状況証拠のみを用いた考察となった。しかし、それらを通時的に、且つ当時の国際情勢を考慮しつつ、検討することで、以上のような歴史的な事情が想定できるのではないだろうか。

註

- (1) 編年については、全つ Alan, B. Lloyd(ed.), *A companion to ancient Egypt*, Wiley Blackwell, 2010 に拠った。
- (2) 周藤芳幸「ワイン色の海を越えて——紀元前2千年紀の東地中海と東西文化交流への一考察——」、『西アジア考古学』、第三号、二

〇〇二年、三四頁。また、ポダニーによると、シケーネの王国は、カナンにおけるエジプトの属国のうちで、最も小さいものにも満たない範囲しか支配していなかった可能性を指摘している。Amanda H. Podany, *Brotherhood of Kings: How International Relationship Shaped the Ancient Near East*, Oxford University Press, 2010, p.261.

(3) エジプトとエーゲ海世界との、とりわけクレタとの交流の痕跡が考古遺物によって認められているが、その性格や規模に関しては分からないことが多い。当時の社会規模に関しては、一定の中央集権化が達成されていたエジプトに対して、エーゲ海世界はまだ小規模な平等な村落からなる社会であった。よって、両地域は全く社会規模が異なっていたと思われる。そのような状況下で、交易や文化交流は想定しにくいいため、シリアやパレスチナの仲介者を通しての物質的交流が主であったとみなす研究者もいる。

Louise Steel, *Egypt and the Mediterranean World*, in Toby Wilkinson (ed.), *The Egyptian World*, Routledge, 2007, pp.459-460.

(4) Pendlebury J.D.S, *Egypt and the Aegean in the Late Bronze Age*, *Journal of Egyptian Archaeology*, vol.16, 1930, pp.75-92.

(5) Kantor H.J, *The Aegean and the Orient in the Second Millennium BC*, *American Journal of Archaeology*, vol.51, 1947, pp.3-103.

(6) アマルナ文書において、エーゲ海世界との書簡が発見されていないのは、シケーネには、多数の王が存在しており、統一されていなかったことを原因にあげる研究者もいる。Amanda H. Podany, *op. cit.*, p.261.

(7) その地から出土した彩色ブラスターには、「牛跳び」の場面をはじめとする植物文、動物文、幾何学文などが描かれていた。これらの表現は、クレタ島のクノッソス宮殿を中心とするミノア文明が持つ独特なモチーフである。近藤二郎『エジプトの考古学』同成社、一九九七年、一二二―一二三頁。

(8) Vercoutter, J. *L'Égypte et le monde égyptien préhellénique : étude critique des sources égyptiennes (du début de la XVIII^e à la fin de la XIX^ele dynastie)*, Imprimerie de L'Institut Français D'Archéologie Orientale, 1956, pp.188-189, 194.

(9) ヴェルクテールは、ウセラムンとレクミラ墓の壁画表現の歴史的事実性を認める一方で、図像における高官の役割を根拠に、それ以外のメンケペルラーソネブ、セネムト、フイミレ及びアメンハブのそれを否定している。Ibid. pp.188-189, 194.

(10) Panagiotopoulos, D., *Kefiti in Context: Theban Tomb-Painting as Historical Source*, *Oxford Journal of Archaeology*, vol.20, no.3, 2001, pp.263-283. 或いは、Panagiotopoulos, D., *Foreigners in Egypt in the time of Hatshepsut and Thutmose III*, in Cline E. H., and O'Connor (eds.), *Thutmose III: A New Biography*, The University of Michigan Press, 2006, pp.386-389.

(11) Wachsmann, S., *Aegeans in the Theban Tombs*, Leuven, Uitgeverij Peeters, 1987, pp. 34-35.

- (12) エーゲ海の人々を示すエジプト語の通説について Cline, E.H., *Sailing the Wine dark sea: International Trade and the Late Bronze Age Aegean*, BAR International Series vol.591, Oxford, Tempus Reparatum, 1994, p.32. を参照。一方では、それは異なる意味に用いられ、Strange, J., *Caphtor/Kefiu: A New investigation*. Leiden: Brill, 1980, pp.145-184, 46-54. Duboux, Y., *Des Minoens en Egypte? « Kefiou » et « les îles au milieu du Grand Vert »*, Louvain-La-Neuve: Université Catholique de Louvain, 2003, pp.211-228.
- Vanderslyen, C., *Ketion-Crète? Objections préliminaires*, *Göttinger Miszellen* vol.188, 2002, pp.109-112. Vanderslyen, C., *Ketiu: A Cautionary Note*, *Oxford Journal of Archaeology*, vol.22(2), 2003, pp.209-212. を参照。
- (13) Uroš Matic, "Minoans", *kftju and the "Islands in the Middle of wsd wr"* Beyond Ethnicity, *Ägypten und Levante* XXIV, 2015, pp. 277-280.
- (14) その数少なからず例外として、ケルターの研究があげられる。Kelder, J., *Royal Gift Exchange between Egypt and Mycenae: Olives as Greeting Gifts in the Late Bronze Age Eastern Mediterranean*, *American Journal of Archaeology*, vol.113(3), 2009, pp.339-52.
- (15) 今日では、エーゲ人と思われる三人の人物が認められるが、興味深いのは、ロバートアイが一八三七年に大英博物館に送るために、模写した図には、更にその前に別の三人のエーゲ人が描かれていたことである。Wachsmann, S., *op.cit.*, 1987, P.27-28.
- (16) 辛うじて、エーゲ文明圏に特徴的な靴が残っている。Ibid., p.31.
- (17) Davies, N. de G., *The tomb of Pygme at thebes*. 2 vols. New York, 1922.XVIII
- (18) Panagiotopoulos, D., *op.cit.*, 2001, 46-54. Panagiotopoulos, D., *op.cit.*, 2006, pp.386-388.
- (19) Strange, J., *op.cit.*, 1980, p.45.
- (20) Ibid., p.46.
- (21) Ibid., p.53.
- (22) この史料は、トトメス三世の治世十二年から四十二年までの王の事績に関する記述である。O'Connor, D., *Thutmose III: An Enigmatic Pharaoh*, in Cline E. H., and O'Connor (eds.) *Thutmose III: A New Biography*, The University of Michigan Press, 2006, pp. 27-31.
- (23) Breasted, J.H., *Ancient Records of Egypt*, vol.2, Chicago, 1906, 492.
- (24) Ibid., 537.

- (25) Ibid. 493.
- (26) Ibid. 494.
- (27) 厳密には、アメンホテプ三世の治世に活躍した高官の墓にも、トトメス三世の治世と同様に、エーゲ人と思われる人物が描かれている。例を挙げると、ケンアムン(CT93)の墓やアネン(CT20)のそれである。しかし、両者とも解釈上の問題、すなわち、果たしてそれがエーゲ人を示しているのか否かといった根本的な疑問があるため、ここでは議論に加えなかった。当問題については、Wachsmann, S. *op. cit.*, 1987, P.38-40. を参照せよ。
- (28) 周藤芳幸『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』名古屋大学出版会、二〇一四年、四二頁。
- (29) Edel, E. *Die Ortsnamenlisten aus dem Totentempel Amenophis III*. Peter Hanstein, 1966.
- (30) Kirchen, K. Egyptian New-Kingdom Topographical Lists: An Historical Resource With Literary Histories. In Brand, P and Cooper, L (eds.), *Causing His Name to Live: Studies in Egyptian Epigraphy and History in Memory of William J. Murnane*. Brill, 2006, pp. 129-130.
- (31) Strange J. *op. cit.*, 1980, pp.21-22.
- (32) 他の解釈に関しては、Ibid. p.22. 及びCline, E.H. *op. cit.*, 2009, p.115. を参照しよう。
- (33) ハナール・M. 金井和子訳『黒いアテナ 古典文明のマフロ・アシマのルーツII 考古学と文書による証拠』藤原書店、二〇〇五年、七九三〜七九六頁。
- (34) Cline, E.H. Amenhotep III, the Aegean, and Anatoria." In O'Connor, D and Cline, E. (eds.), *Amenhotep III: Perspectives on His Reign*. The University of Michigan Press, 1998, pp.236-239. 周藤芳幸、前掲書、二〇一四年、四三三〜四四頁。
- (35) アメンホテプ三世やその妻ティイのカルトーシュが刻まれた遺物が、ギリシア本土のミケーネ、アイオス・エリアス、ロードスの島のイアリソス、アイア・トリアダ、カーニア、そしてクノッソスの計六つの遺跡で出土しており、うち四つが、エーゲリストの地名と合致している。Ibid. p.246.
- (36) Ibid. pp.244-245.
- (37) Jacobus Van Dijk. The Amarna Period and Later New Kingdom. in Shaw, I (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*. Oxford university press, 2000, pp.269-281.

- (38) Kelder, J., *The Kingdom of Mycenae: A Great Kingdom in the Late Bronze Age Aegean*, CDL Press, 2010, pp.68-69.
- (39) Hankey, V., The Aegean Interest in El Amarna, *Journal of Mediterranean Anthropology and Archaeology*, vol.1, p.41.
- (40) Kelder, J., *op. cit.*, 2009, pp.339-52. 及び Kelder, J., *op. cit.*, 2010, p.67.
- (41) Parkinson, R. B., and Schofield, L., Images of Mycenaean, a Recently Acquired Papyrus from El-Amarna, in Davies, W. V and Schofield (eds) *Egypt, the Aegean and the Levant: Interconnections in the second Millennium BC*, London, 1995, pp.125-126.
- (42) 屋形禎亮「ナイルが育んだ文明」大貫良夫他著『世界の歴史ー人類の起源と古代オリエント』中央公論新社、二〇〇九年、五一―五二六頁。
- (43) Darnell, J. C. and Menassa, C. *Tutankhamun's Armies: Battle and Conquest during Ancient Egypt's Late 19th Dynasty*, John Wiley & Sons, Inc, 2007, p.141.
- (44) *ミタニニにまじりて、自国の勢力下にあつたチユニップやカデシユが荒廢するなど、懸案事項が多く残つてゐたにも関わらず、なほ遠征を休止したのかは、よく説明できなかつた。* Redford, D. B., The Northern Wars of Thutmose III, in Cline E. H., and O'Connor, D (eds) , *Thutmose III: A New Biography*, pp.27-31, The University of Michigan Press, 2006, p.335.
- (45) Cline, E., Assuwa and the Achaeans: The Mycenaean Sword at Hattusas and Its Possible Implication, *Annual of the British School at Athens*, vol.91, 1996, p.138.
- (46) Bryce, T., *The Kingdom of Hittites*, Oxford University Press, 2005, pp.124-125.
- (47) *Ibid.*, pp.138-140.
- (48) Cline, E., *op. cit.*, 1996, p.144.
- (49) Cline, E., *op. cit.*, 2001, pp. 248-249.
- (50) Moran, W., *The Amarna Letter*, The Johns Hopkins University Press, 1992, p.41.
- (51) *Ibid.*, p.103.
- (52) Cline, E., *op. cit.*, 2001, p.249.